HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	活平神社に関する一考察
Author(s)	持田, 誠
Citation	浦幌町立博物館紀要, 20, 15-19
Issue Date	2020-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77487
Type	journal article
File Information	Bull. of the Historical Museum of Urahoro_20_15-19.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

活平神社に関する一考察

持田 誠[1)]

Makoto Mochida, 2020. A Study on the Katsuira Shrine in Urahoro, Tokachi region, Hokkaido.
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 20: 15-19.

はじめに

上浦幌地区の南部に位置する活平地区には、活平神社がある（図１）。活平神社の創建については、資料により1904（明治37）年と1908（明治41）年の２説がみられ、現在もその由緒は確定していない。

そこで、現在把握できている活平神社に関する記述資料を並べ、活平神社の創建年について、考察した。

町村史の記述の変遷

『浦幌町百年史』（浦幌町百年史編さん委員会 1999）には、活平神社について、次のような記述がある。

活平八幡神社

明治三七年朝日浅吉が鷲見農場の管理人となった際に、入殖者たちと設置した。

祭神　八幡神・天照皇大神

祭礼　春秋　四月十五日　九月十五日

『浦幌町百年史』

『浦幌町史』（浦幌町史編さん委員会 1971）には、設立の年について記述は無い。また、祭神として八幡神への言及が無い。

祭神は天照皇大神、朝日農場に入殖と同時に、敬神の心厚き同志が相諮って神社を建立したという。維持管理は氏子全員で、祭礼は、春秋二回行なっているが、四月十五日と九月十五日がそれである。

『浦幌町史』

『浦幌村五十年沿革史』（浦幌村教育協会 1949）は、「活平部落誌」の項で活平神社へ言及し、以下のような記述がある。

活平神社は明治四十一（1908）年建立八幡神を祭神として毎年四月十日及九月十五日祭典を執り行つている。

『浦幌村五十年沿革史』

図1　活平神社の鳥居。神明鳥居と呼ばれる型のひとつで、浦幌町内でもっとも多くみられる。2016年8月撮影

このように、活平神社の創建時期については、各町史の間で微妙に記述が食い違っている。『浦幌村五十年沿革史』の記述する1908（明治41）年という年は、６月に上浦幌駅逓所が解説された年にあたるが、このとき駅逓の管理人となったのが、活平神社の初代総代（図２）となる、朝日浅吉（図３）であった。

朝日は、1904（明治37）年に中川北松から、三分割された熊谷農場のうち、鷲見邦司所有地（鷲見農場）の管理人を引き受けている。『浦幌町史』に記述の「朝日農場」とは、管理人を引き受けた鷲見農場のことを指しているものと思われることから、『浦幌町史』も1904（明治37）年の立場に立つものと考えられる。

つまり、『浦幌町百年史』と『浦幌町史』は、朝日が鷲見農場の管理人となった年を、『浦幌村五十年沿革史』は、朝日が上浦幌駅逓所の管理人となった年を、それぞれ創建の年として記述しているのである。

『朝日家三代記』の記述

活平神社と関係の深い朝日家についての資料として、『朝日家三代記』（田所 1978）がある。朝日家は、1897（明治30）年に福井県から浦幌太（現在の朝日地区）へ、朝日又兵衛と妻ミナ、当時16歳だった息

1) 浦幌町立博物館　〒089-5614　北海道十勝郡浦幌町字桜町16

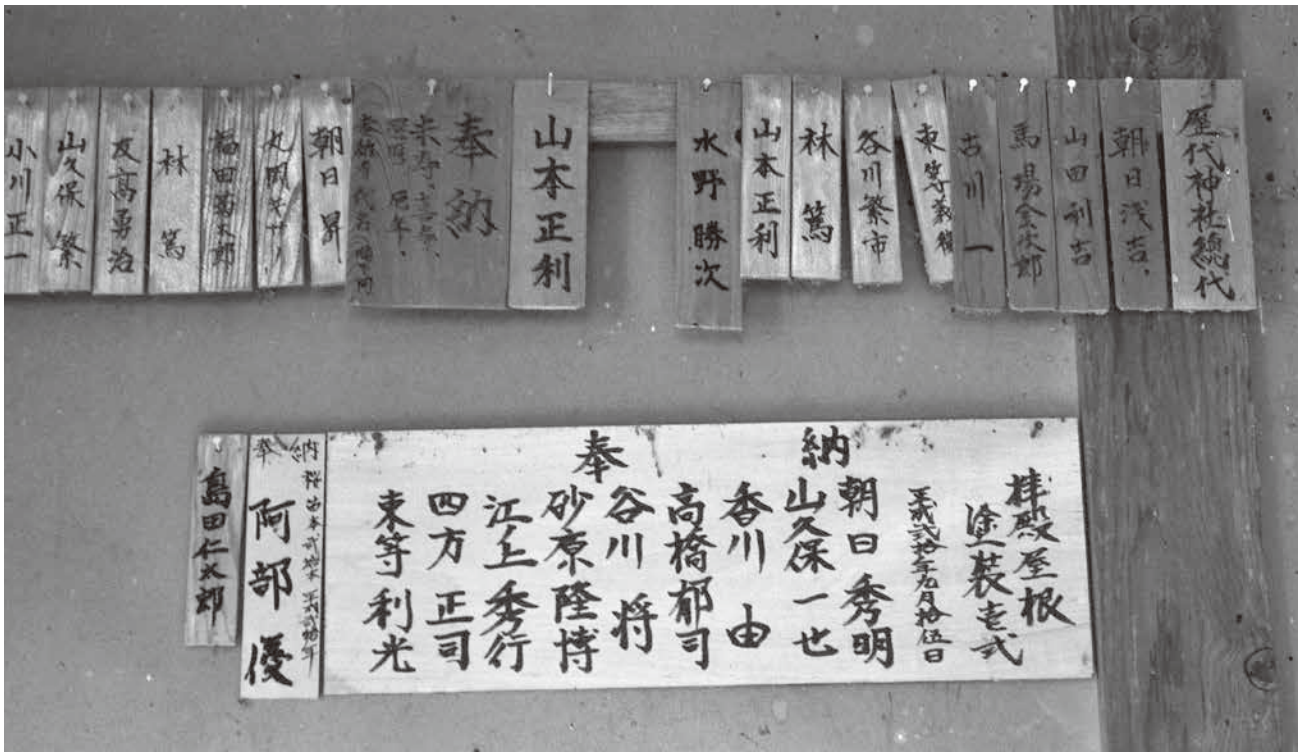


図2　活平神社拝殿内に掲げられた、歴代神社総代の氏名が書かれた木札や、奉納者の氏名を記した木札。「歴代神社総代」の筆頭に朝日浅吉の名があるほか、『活平の歩み』を記した水野勝次の名もあることがわかる。また、奉納者名の木札には、「丸岡キサノ」「林篤」の名がみえる。2017年11月21日撮影

図3　朝日浅吉

子の浅吉らで入地した。

浅吉が21歳となった1903（明治36）年３月16日に、小川長四郎・すみの長女とめと結婚しているが、この婚姻届は「十勝郡生剛村字下浦幌番外地」となっている。実際の場所は円山地区の浦幌川左岸で、円山の南方１km地点とされる。ここで1904（明治37）年11月25日に、長男である昇が出生している。したがって、朝日浅吉は、1904（明治37）年には円山に居住していることがわかる。

1904（明治37）年５月に熊谷農場が熊谷泰造、鷲見邦司、橋本順三の三氏に分割され、「鷲見氏の持分は下川流布から活平口に至る耕地、好適地を含めて約三百町歩で、管理は朝日浅吉があたった」（『朝日家三代記』）とされる。つまり、このとき朝日浅吉は、円山に居住しつつ、活平以北の鷲見農場を管理していたことになる。

1905（明治38）年に、活平駅逓所（上浦幌駅逓所）が設けられることになり、守谷晋氏が管理にあたることになったのが、管理人が中川北松氏に代わった。この赤川氏の推薦で朝日浅吉が「円山から移住して牧場管理と共に駅逓所を明治四一年六月開設した」とされる（『朝日家三代記』）。

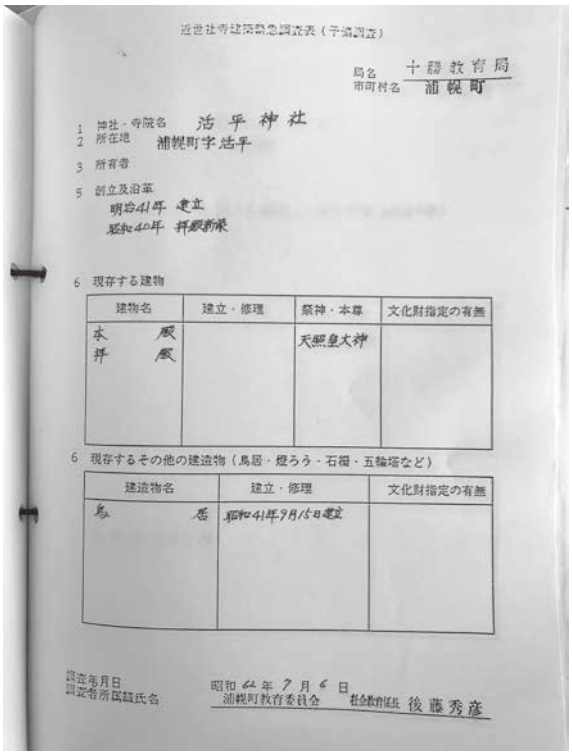
つまり、それまで円山に居住しながら、上浦幌地区の鷲見農場の管理をしていた朝日浅吉は、上浦幌駅逓所の設置にともなって、1908（明治41）年に活平へ移住し、名実ともに地域の住人となったことになる。

『朝日家三代記』での活平神社についての記述は以下とおりである。

活平神社は明治四十一年建立、八幡神を祭神としている。土地は朝日家によって寄付され、部落一同によって社殿、鳥居等設立され毎年四月十日及九月十五日祭典が行なわれている。

『朝日家三代記』

『朝日家三代記』の記述は、土地の寄付、社殿・鳥居の建立の部分を除くと、『浦幌村五十年沿革史』の記述を、そのままなぞっているようにみえる。はっきりしたことは言えないが、『朝日家三代記』は、活平神社の創建年については、独自の判断をしていないように思える。



近世社寺建築緊急調査表（予備調査）

局名　十勝教育局
市町村名　浦幌町

1 神社・寺院名　活平神社
2 所在地　浦幌町字活平
3 所有者
5 創立及沿革
明治41年 建立
昭和40年 拝殿新築

6 現存する建物

建物名	建立・修理	祭神・本尊	文化財指定の有無
本殿			
拝殿		天照皇大神	

6 現存するその他の建造物（鳥居・燈ろう・石祠・五輪塔など）

建造物名	建立・修理	文化財指定の有無
鳥居	昭和41年9月15日建立	

調査年月日　昭和44年7月6日
調査者所属職氏名　浦幌町教育委員会　社会教育主任　後藤秀彦

図4　1987年に北海道教育委員会が実施した「北海道近世社寺建築緊急調査」における調査票の活平神社の項（浦幌町立博物館所蔵）

図5　活平神社拝殿内に掲げられた、1966（昭和41）年の拝殿新築寄付者名簿。2017年11月21日撮影

活平神社拝殿修復工事奉加者御芳名　平成19年9月15日

図6　活平神社拝殿内に掲げられた、2007（平成19）年の拝殿修復工事の参加者名簿。2017年11月21日撮影

『活平の歩み』と『近世社寺調査』

これら以外の資料としては、下記のものがある。

活平神社の総代を務めた水野活次は、私家版の部落史にあたる『活平の歩み』（水野 1989）を著し、以下のように記述している。

朝日家は、浦幌太（現朝日）に入地し、明治36年円山に移住したが上浦幌に駅逓所の経営のため一家あげて41年、活平の現在地に入植したのであるが、鷲見農場の管理と上浦幌駅逓所を受継ぐため浅吉氏は、38年頃より活平にしばしば来ていたのである。

活平神社は明治治41年八幡宮を祭神として建立される。大工は大野佐六によって拝殿鳥居が造営された。現在地より少し下手の林さんの畑と神社の森との境位である。

現在の新しい拝殿は、昭和41年４月15日本別の中前建設によって建立され、拝殿内に掲示されている寄付の木札は地域の歴史を教えるものである。木札の字は林供養丸氏が書いたものである。林供養丸氏は昔の師範出の僧侶であり、十勝に来た時は十勝支庁より書記官にとの話もあったが、断って川流布に入植、現在地に移住された珍しい経歴を持つ人である。

『活平の歩み』

ここでも、朝日浅吉が活平へ居住したのは1908（明治41）年で、それ以前は農場の管理や駅逓所の開設準備のため、円山からときどき訪れていたことが記されている。これは、活平神社の起こりを考える上で重要な視点と思われる。

浦幌町郷土博物館（現、町立博物館の前身）の後藤秀彦は、1987（昭和62）年に北海道教育委員会が実施した「北海道近世社寺建築緊急調査」に参画し、町内の全神社について、沿革や現存構造物について調査している。この報告が、『浦幌町郷土博物館報告』に一覧として掲載されている（後藤 1990）。ここでの活平神社の創建は、1908（明治41）年としている。

念のため、北海道近世社寺建築緊急調査の調査票原本（「近世社寺建築緊急調査表（予備調査）」、図4）も確認したところ、「明治41年建立」と記されていた。ただし、その出典は明記されていなかった。

後藤（1990）は、『朝日家三代記』や『浦幌村五十年沿革史』、『活平の歩み』を参照しているのではないかと推察されるが、調査票原本の記述をみると、祭神が八幡神ではなく天照皇大神と記されており、この点が上記の文献と異なる。

考　察

活平神社拝殿に残る歴代の総代名を記した木札（図２）から検討しても、同社の初代総代が朝日浅吉であ

図7　活平神社拝殿内に掲げられた、林篤奉納の虎の刺繍絵。
2017年11月21日撮影

ることは明らかである。しかし、各資料を比較検証したところ、1904（明治37）年には、朝日はまだ活平に住んではいないようである。この点で「明治37年創建説」は､神社所在地域にまだ居住していない者を、氏子総代とすることがあるだろうか、という観点から疑問が残る。

この点を考慮したうえで、以下のような仮説も考えられる。浦幌の各集落の神社の起こりをみていくと、例えば上厚内神社のように、もともとは地域の入植者などが農耕神である八幡神を祀る小祠を建て、のちに氏子組織を整えていわゆる「神社」の形態をとるにあたり、天照皇大神を祀るようになったケースがみられる。後藤（1990）も、町内の神社について「圧倒的に多いのは八幡神社と稲荷神社で、八幡神社は上浦幌方面を中心として万年・養老・静内にも及び」と報告しており、多くの神社の原初形態が八幡神であることをうかがわせる。

これらの事例から考えると、朝日浅吉がまだ活平へ居住していなかった1904（明治37）年に、敬神者有志が八幡神を祀る小祠を建てて神社の原初形態をつくり、これを母体として、1908（明治41）年の朝日の活平移住にともない、「活平神社」として、正式な神社の形態を整えたという見方もできるのではないだろうか。

図8　活平神社拝殿内に保存されている軍配
2017年11月21日撮影

活平神社に残る絵馬など

活平神社拝殿には、多くの刺繍による奉納物が残されている。まず目を引くのは、『活平の歩み』（水野1989）が「地域の歴史を教えるもの」と記している、拝殿修復などに際しての寄付者の名簿（図５、図６）である。

同書によると、活平神社では1966（昭和41）年に、中前建設の手により新たな拝殿を造営したとされる。「林供養丸による寄附の木札が」は図５がそれに該当すると思われるが、枠木は新しいもののようである。後世に修復されたものか、今後検証が必要である。

また、現在の拝殿は2007（平成19）年に修復されており、拝殿内にこのとき修復に参加した者の名簿が掲出されている（図６）。

そのほかに目を引くものとして、1921（大正10）年丸岡キサノ奉納の絵馬、1938（昭和13）年林篤奉納の虎の絵（図７）がある。いずれも刺繍で描かれているという特徴がある。丸岡キサノの絵馬については、別に調査を実施している（持田 2020）。

また、変わったものでは軍配が保存されている（図７）。

このように、活平神社については記述資料が多く、拝殿内にもさまざまな資料が現存している。各集落の神社史については、多くについて史料が現存しておらず、不明な点が多いが、活平神社については、これらを詳細に調査・分析することで、不明点が明確になる可能性がまだあると考えられる。

引き続き調査を進め、創建年や祭神の変遷を含め、神社史の詳細を明らかに、後世のために記録化することが今後の課題である。

謝　辞

活平神社の調査にあたり、浦幌神社宮司の背古宗敬氏、活平神社管理者の阿部優氏、博物館実習生（帯広畜産大学大学生、当時）の元木咲氏に協力いただいた。『活平の歩み』の調査にあたり、帯広百年記念館所蔵の「井上壽資料」を使用し、同館の大和田努学芸員に協力いただいた。皆様に深謝したい。

引用文献

後藤秀彦，浦幌町の神社．浦幌町郷土博物館報告35: 478-484.
水野勝次，1989．活平の歩み．自費出版.
持田誠, 2020. 活平神社に残る丸岡キサノ奉納の絵馬. 浦幌町立博物館紀要, 20: 21-29.
田所武，1978．朝日家三代記．柏李庵書房，帯広．302pp.
浦幌町史編さん委員会, 1971．浦幌町史．浦幌町役場，浦幌．922pp.
浦幌町百年史編さん委員会，1999．浦幌町百年史．浦幌町役場，浦幌．823pp.
浦幌村社會教育協會，1949．浦幌村五十年沿革史．浦幌村役場，浦幌．424pp.